

戦争したら得るものもあるけど、得るものよりも失うものの方が多くなって来た。
それで、ハドリアヌスは拡大膨張路線をやめて、これからはローマの内部をガッチリ固めて行くことに力を注ぐ。ローマの内部をローマ化していく。ローマの文明で人心をみな1つにまとめていく。これに精力を傾けるんですね。
なので、ハドリアヌスの時代から、ローマ帝国はちょびっとずつしぼんでいきます。

このローマ化政策に於いて、最も迷惑・酷い災難を被った民族がいるんですね。ユダヤ人です。
ハドリアヌスは、ユダヤ人に関することでは大体3つのことをやろうとしました。

1つはエルサレムの名前を変えようとしたんです。AD70年にエルサレムが炎上した後ハドリアヌスの時代まで、エルサレムはどんな状態になっていたか？ ゴミ捨て場です。
この民族はもう終わった民族、自分の神からも見捨てられた民族だということをビジュアルで分かるようにするため、彼らが一番大事にしていたエルサレム神殿の跡は瓦礫のまんま。
そこをウロチョロしてるのは野良犬・野の獣。そして、ゴミ捨て場のような惨めな・悪臭のする・瓦礫しか残っていない状態にわざとしたんですねえ。

ところが、いつまでもゴミ捨て場にするのは美しいローマにふさわしくない。それでハドリアヌスは、「まずエルサレムという名前がアカン。名前を変えるんや。」何と変えるか。アエリア・カピトリナ。アエリアはハドリアヌスのファミリーネームです。自分の名前をエルサレムに置き換えたんです。

カピトリナは何か？ ローマは7つの丘で出来ています。その中で一番標高の高い丘がカピトリナの丘で、その丘の上には、ローマの最高神にして守護神であるジュピターの神殿があったんですね。だから、カピトリナの丘はジュピター神殿の代名詞でもあったんです。

ということは、アエリア・カピトリナは“アエリア家（ハドリアヌスの家）が作ったジュピター神殿”ということですよ。エルサレムの名前がローマの守護神の名前に置き換えられてしまった。

2番目。名前をそのようにしただけではなく、エルサレム神殿跡にジュピター神殿を建てるって言うんです。ユダヤ人たちが最も神聖な場所とみなしていた所を、彼らが一番見下している偶像の宮に改造してしまう。これ聞いて怒らないユダヤ人て いないと思いますよ。

3番目。割礼（かつれい）を禁止したんです。ユダヤ人の男の子は、生まれて8日目に男性器の皮の先端をチョキッと切るんですね。これを割礼と言います。割礼はユダヤ人が神と契約を結んだ、その契約の印なんです。ユダヤ人男子の肉体上のアイデンティティーの印は割礼。これがユダヤ人の印です。今でも、異邦人がユダヤ教に改宗する場合は割礼を受けないとダメですね。

しかし、ハドリアヌスは割礼を非常に野蛮な習慣だと考えたんです。
男性の性器の皮切るてね、ナニ考えてんねん！ そんな野蛮なことはおやめなさい！ それで禁じたんです。これは、いわば善意から出た禁止だったんですね。
ところが、ユダヤ人に見れば、神との契約の印を取り上げられるということですよ。エルサレムの名前は変えられる。エルサレムの敷地には偶像の神殿建てるって言っている。その上、自分たちのユダヤ人としてのアイデンティティーまで禁止すると言うのか。けしからん！

それを知ったユダヤ人たちの怒りが燃え上がっていき、特にユダヤ地方で 2 人のリーダーに率いられた軍団が巨大化し、なんとローマ帝国をユダヤ領域から完全に追放することに成功するんです。2 人のリーダーとは精神的・宗教的リーダーと軍事的リーダーの 2 人です。

精神的リーダーはラビ・アキバ。ユダヤ人問題に詳しい人は、聞いたことがあるんじゃないですか？ユダヤ教の歴史の中に色々な優秀なラビが出て来ますが、最も優れたラビの 1 人とされていて、エピソードがたくさんあります。

彼は 40 歳まで読み書きが出来ませんでした。ある大富豪の娘のラケルというユダヤ人女性と相思相愛で結婚することになるのですが、結婚の条件は「あなたはトーラー（ユダヤ人の旧約聖書）を研究・学ぶ人であってほしい。」そこで、ラビ・アキバは 40 歳になってから子供と一緒に学校に行き、アレフ・ベイト（アルファベット）、ヘブライ語のあいうえおの“あ”から学んでいくんです。

学び出したのは 40 歳で非常に遅いのですが、メキメキとトーラー研究の非常に優れた学者になっていきました。そして、ユダヤのレビの歴史の中で初めて、口伝律法と言われているものを項目別に分類整理した、言わば、後のミシュナーの先駆者なんですね。

非常に優れた学者となり、且つ分かりやすい話をするので有名で、同胞ユダヤ人の所を色々巡りながら、トーラーを論じたりしながら、不信仰なユダヤ人たちをリバイブするのに用いられた人だと言われています。ラビ・アキバ。彼が精神的リーダーです。

では、軍事的リーダーは誰でしょう？ バル・コクバです。これは“星の子”という意味で、本名ではありません。バル・コクバの出自は殆ど資料が残ってなくて分からない。分からないけど、あまり敬虔な人物ではなかったようです。はじめは。というのは、タルムードの中にこんな話があるんです。バル・コクバは百戦錬磨の青年軍人で、非常にカリスマ的魅力があったけど、神にこう祈っていた。「神よ、私を助けないでください。私が勝った時、あなたの力のおかげだと思われるのは面倒くさいですから。私から剣を取り上げることはしないでください。私は剣を持ったら、あなたの力を借りなくても十分勝てるんです。」

なので、彼は敬虔な人というよりも、非常に腕っぷしの強い巨漢の人物だったようです。そして、神に信頼するよりも剣を信頼するタイプの人物で、サンヘドリンでも“彼はナンかなあ…”ユダヤ評議会でも“こいつ、除名すべきではないか”と思われていたのですが、その窮地を救ったのがラビ・アキバだったのです。

なんと、ラビ・アキバはバル・コクバと出会って話をしているうちに、何とも言えない彼の人格的魅力というかリーダーシップというか、内側から出て来る魅力に魅了されてしまうんですね。そして、とうとう一線超えてあることを言っちゃった。何と言ったんでしょう？

「彼はメシアだ。旧約聖書に預言されていた人類の救世主/ユダヤ人の王として来られる方、それはバル・コクバだ！」と言ってしまった。

普通の凡人がバル・コクバをほめそやしても「ああ、まあまあ そういう意見もあるでしょう」となりませんが、当時のユダヤ世界で最も尊敬されていたラビがお墨付きを与えたんです。

「この人、ただの人じゃないよ。この人はメシアです！」と言ってしまったんですね。このラビ・アキバの全面的支持によって、ユダヤ人たちは“ええっ！”と心が燃え上がってしまった。

今はハドリアヌスの時代で、多くのユダヤ人たちは非常に圧迫を受けている。しかし、とうとう神はユダヤ人の窮状を見て、メシアを与えてくださった。それがバル・コクバである。彼に従って戦うならば、我々は必ずローマを追い出し、やっつけることが出来る。そして、メシアが王様となるメシア王国が遂に実現する。新しい時代の夜明けが今、我々が生きているこの時代の今、始まったのだー！

これを聞いて、今まで虐げられていたユダヤ人は虐げられていた分、余計に興奮状態になり、「バル・コクバに従え！」 いつの間にかユダヤ地方に戻っていたユダヤ人だけでなく、世界中から続々と集まって来て、バル・コクバを指揮官にして戦うんですね。そして、とうとうユダヤのこの領域の中から、ローマを完全に追放することに成功したんです。

驚いたのはハドリアヌスです。だって、ユダヤ人たちは 70 年ほど前に、あんなにめちゃくちゃにローマに滅ぼされたんですよ。ローマに逆らうとどんなに酷い結末になるか、ついこの間経験したばかりじゃないの?! それなのに、またしてもローマに背くのか？

彼らは死を恐れない戦い方でローマを追い出してしまったので、当時ローマが持っていた最も有能な将軍セベルス、彼はブリタニア（今のイギリス）の反乱を抑えるためにそこで戦っていたけど、「お前、その反乱、もうええ。お前でなくても、その反乱治めることが出来る。とにかく戻って来い」と呼び戻すんです。そして、セベルス将軍の下に 3 万 5 千人の大群がユダヤに向かい、第二次ユダヤ戦争が始まる。これが“バル・コクバの乱”です。

3 万 5 千の兵を率いてユダヤに入っていくのですが、あの天才的将軍セベルスが初戦でポッコボコにやられるんですよ。ユダヤの軍隊にめちゃくちゃに負けるんです。数で言うたら、ユダヤ軍の方がはるかに劣るんですよ。しかし、バル・コクバの姿を見たユダヤ人たちはすごく勇気凛々になって、ローマをやっつけてしまうんですね。

しかしセベルスは、その約 70 年前にウェスパシアヌスやティトゥス将軍がやったのと同じ戦い方を取るんです。それは 1 個 1 個の町を潰して行く各個撃破。一つひとつのユダヤの町を 3 万 5 千で潰して行って、最後エルサレムだけを残す。それで、昔やったようにエルサレムを兵糧攻めにします。

そうして、彼らが疲れ切ったところを一気に叩いたんですねえ。

この戦争でバル・コクバは死に、最後まで生きていたラビ・アキバは、ローマによって実に残酷ななぶり殺しのような拷問を受けながら死んでしまったのです。

その結果、ユダヤ人たちはどんなことになったでしょう？ 5 つのことですね。

①エルサレムの名前がアエリア・カピトリナになってしまった。

②昔ここにユダヤの神殿があったけど、その神殿跡にジュピター神殿が建てられてしまった。

③エルサレムの南門に猪の首が掲げられた。エルサレムを最後に殲滅した軍隊は第 10 軍団で、その印/記章/シンボルマークが猪なんです。イノシシは野生の豚みたいなもんじゃないですか。

ユダヤ人たちは豚を汚れた物として一切食べない。触れない。

エルサレムの南の入り口に豚の頭が掲げられてるんですよ。もうこれは、ユダヤ人に対する勝利宣言であると同時に、ユダヤ人の心を最も踏みにじるという象徴的な行為だったのです。

④この地方全体はそれまで“イスラエルの地”と呼ばれていました。ヘブライ語で“エレッツ・イスラエル” / “ジュディア（ユダヤ）・サマリア地方”という言い方をしていたんですね。それが聖書に基づく名前です。

聖書に由来する地名が付いている以上、ユダヤ人たちは散らされても散らされても また帰って来る。二度と戻って来れないようにするには、彼らの頭の中からこの地名の記憶を失くしてしまうのが一番良い。もっと言えば、ここの地名をそもそも変えてしまうことがいいんだということで、エレッツ・イスラエル/ジュディア・サマリアを“パレスチナ”という名前に変えた。これがパレスチナという言葉の由来です。

パレスチナは元々、旧約時代のユダヤ人の永遠のライバルだった“ペリシテ”という言葉から出来ました。ハドリアヌスはユダヤ人の記憶の中から、彼らの土地に対するノスタルジアを追い出すために地名を変えてしまえ！パレスチナとしたんです。

⑤ユダヤ人たちはエルサレムに二度と入ってはいけません。一歩でも入ったら即処刑。エルサレムに入城したら即刻死刑という法律を作ったんですね。それで、ユダヤ人たちはもはやエルサレムに戻ることが出来ない。しかし唯一の例外がありました。年に1回/アブの月の第9日だけはエルサレムに戻ることが出来たんです。

アブの月の9日は第一神殿が炎上した日、第二神殿が炎上した日。同じ日だったんです。ユダヤの神殿が炎上・破壊したことを泣くために、年に1回だけ、この日だけは入ることが許されました。但し入城する権利はタダではありません。高額なお金を払わなければならなかったんです。

さて、これからどういうことが言えるんでしょう？ ユダヤ人たちは、独立しようとすることによって、その前に持っていた権利すらも全て失うことになってしまったんですね。このような大きな失敗の根本原因は、メシアでない者、すなわち偽メシアをメシアとして受け入れた結果、最も酷い結末に陥ってしまったのです。

今でも偽キリスト・偽メシア、自らをキリストと名乗るキリスト教系の新興宗教がたくさんあります。韓国系由来のものが多いですね。日本でもたくさん出て来ていますね。メシアでないにもかかわらず、偽メシアをメシアとして信じて進んで行く、ついて行くというのは悲惨な結末になるということなんです。

信じるということは素晴らしいとよく言われますが、バイブルは決してそんなこと言ってません。信じるのが素晴らしいんじゃないんです。信じることで一番大事なことは、誰を信じるかということです。間違ったものを信じてはならない。信じてはならないものを信じてはならないんです。信ずべきものを信じる。信仰で一番大事なことは信じる対象にある、ということなんです。

次回のごうちゃんねるでは、バル・コクバの乱の時に、偽メシアについて行かなかった人たちについてお話をしたいと思います。また、楽しみにしていただいたら嬉しいです。ということで、また『ごうちゃんねる』でお目にかかりましょう。それでは皆さん、さよなら!!